

## 俗文藝と通信使

杉下元明（東海大学）

江戸時代の一つの特徴は、和歌・漢詩といった「雅文藝」のほかに、浮世草子や人形浄瑠璃、歌舞伎といった、俗文藝がさかえた点にある。

かつて私は「朝鮮の学士李東郭」<sup>1</sup>という文章を書いたことがある。そのなかで触れたように、正徳三年（一七一三）に刊行された『和漢乗合船』という、六巻の浮世草子がある（『叢書江戸文庫34』）。和漢の奇談を二話で一つの対にし、すべて十二対（二十四話）の奇談を集めた書物である。はじめに我が国の奇談をかたり、それを受けて「朝鮮の学士李東郭」なる人物が、それに関連する、漢籍にみえる奇談を物語る。

たとえば冒頭、「雪密夫仲人／不義の女を焼」では桃山時代、明石登高の妻が密通し、それを、小さいという腰元女が登高に密告、明石の妻は破滅するが、小さいも後に非業の死を遂げた、という奇談がまず語られる。それを受けて、「朝鮮の学士李東郭、此事を聞て云く、／昔徳州の軍士劉喜といふもの久しく他国に居たりけるに、其妻、夫の留主の内に、其辺り近き福祐なる者の子と密通す」という具合に、関連した唐土の奇談をかたるのである。

この浮世草子の語り手である「朝鮮の学士李東郭」は、実在の人物であった。正徳元年に来日した通信使の製述官である。すなわち国交文書をつかさどると同時に、詩文の応酬などにつとめた職務であり、三使につぐ地位にあった。

朝鮮通信使が我が国の儒者たちと詩をやりとりするなど、我が国の文物に多大な影響をおよぼしたことは、周知の事実である。なかでもこの正徳の李東郭が広く足跡をのこしていることは、拙稿のほか、はやく松田甲<sup>きのえ</sup>の「日本に名を留めたる李東郭」（『続日鮮史話』）にも述べられている。

たとえば新井白石の詩集の序文や、祇園南海の『伯玉詩稿』すなわち一夜百首の序文をものしたのが、李東郭であった。

正徳の通信使に対しては南海をはじめ室鳩巢・三宅観瀾ら白石の友人七人が中心となって詩文の贈答に当たったのであるが、これら七人の詩集は『七家唱和集』と題して公刊された。これには李東郭が詠んだ漢詩が多数収録されている。

あるいは李東郭は、和泉国（大阪府）の商人唐金梅所の別荘「垂裕堂」のために序を作り、また梅所の詩に次韻するなどもしている。

こういった知名度から、正徳の浮世草子にも、語り手として「朝鮮の学士李東郭」が登場するにいたったのであろう。

<sup>1</sup> 『江戸漢詩』（ペリかん社）。初出は森川昭編『近世文学論輯』（和泉書院）。

通信使が我が国の俗文藝に与えた影響は、このときの浮世草子にとどまらない。たとえば歌舞伎にも通信使の登場するものがある。

「韓人漢文手管始」<sup>2</sup>などがそれであり、これらの芝居の背景となったのは、宝暦十四年（一七六四）の通信使である<sup>3</sup>。

\*

宝暦の通信使は、十代将軍家治の襲職の賀使として、一七六三年秋に国都を出発し、翌年秋に帰還・復命した。慶長の回答兼刷還使からかぞえて十一回目の通信使ということになる。正使は趙曦。彼は甘藷を朝鮮にもたらしたことで名高い。ちなみに韓国でサツマイモをコグ、マないしコクンマというのは、対馬の方言で「孝行芋」というのが伝わったらしい<sup>4</sup>。

ついでながら平成十七年、朝日新聞に「花はさくら木」（辻原登）という小説が連載された。この小説は宝暦十一年、通信使の来日をひかえた京阪で、事前の交渉のために朝鮮人が活躍するフィクションであり、たまたまこのとき京都にあった上田秋成・蕪村らとの交渉までも物語られる。

ところでこの宝暦の通信使は、珍しいものを残している。書記の金仁謙がハングルで、書いた紀行文である。題して『日東壯遊歌』という<sup>5</sup>。

いうまでもなく通信使の紀行文は、漢文で書かれることが通例であった。ハングルの紀行文などというものも、一種の「俗文藝」といえるかも知れない。

この紀行文で金仁謙は、たとえば次のように書く。一月十九日、明石に着いたときの記事である（月の名所としてしばしば和歌に詠まれる「明石」が、異国人の目にも美しいものとしてとらえられたことが知られる）。

この地で見ると月の出が 見事だというので  
船を一行にして進ませ 三使臣のお供をして  
舵楼へのぼり 四方を眺める  
風すみわたり波静か まさに水天一色の景  
やがて月が昇るが その壯観は筆舌に尽くしがたい  
紅雲に手が届きそうであり 海がひっくり返ったようだ  
大きな丸い白玉の輝きが その間より顔を出すと

<sup>2</sup> 今日では一般に「かんじんかんもんでくだのはじまり」と読ませるが、江戸時代の番付では「漢人韓文手管始」と書いて「かんじんかんもんでくだはじめ」と振り仮名をつけた例などもある。

<sup>3</sup> 浄瑠璃では近松門左衛門の「大職冠」が、正徳の通信使を当て込んだ作品である。また「心中宵庚申」には享保の通信使を意識した「結構には段々、朝鮮人のもてなし御堂へも雇はれ、七五三、七五三」という一節がある。上田正昭ほか著『朝鮮通信使とその時代』（平成十三年、明石書店）参照。

<sup>4</sup> 堀井令以知『ことばの由来』（岩波新書）および仲尾宏「趙曦と甘藷」（『朝鮮通信使とその時代』）参照。ちなみに仲尾氏は趙曦を「チョウオム」と読んでおられる。

<sup>5</sup> 高島淑郎よしろう訳で、平凡社から刊行。

光まばゆい黄金の柱が 万里の彼方に伸びる  
我が国の眺めに比べても 倍以上はすぐれているといえよう  
扶桑の国が近いという 何よりの証である

二月三日、名古屋では次のように書いている。

人々の容姿のすぐれていることも 沿路随一である  
わけでも女の人が 皆とびぬけて美しい  
明星のような瞳 朱砂の唇  
白玉の齒蛾の眉  
茅花つばなの手 蟬の額  
氷を刻んだようであり 雪でしつらえたようでもある  
人の血肉をもって あのように美しくなるものだろうか  
趙飛燕や楊太真が 万古より美女とのほまれ高いが  
この地で見れば 色を失うのは必定  
越女が天下一というが それもまこととは思えぬほどである  
これに我が国の衣服を着せ 七宝で飾り立てれば  
神仙鬼神もさながらと 恍惚感いかばかりだろう

異国の風物をえがきだした興味深い描写であり、ハングルの財産として貴重なものといえるように思う。

\*

一行は宝暦十四年二月に江戸に着き、三月十一日に江戸を発った。  
ところが、江戸からの帰途についた金仁謙ら一行を、不幸が襲う。四月七日、大坂での出来事である。

初七日、上房執事で テグ 大邸の人 チェチョンジョン 崔天宗が  
開門を上役に報告した後 自分の部屋へ戻って  
寝ようとしたところ 一人の倭人が  
胸の上ののしかかり 刃物で喉を突き刺した  
天宗は驚いて目を覚まし 声をあげて起き上がれば  
その男は刃物を捨て 転がるように逃げて行く  
一行の人々も仰天し 急ぎ起き出し集まってみると  
天宗は槍の穂先のような刃物を 抜き取り倒れ伏していたが  
その苦悶のさまは とても見ていられない  
卯の刻頃に絶命する残酷、無惨、言葉もない

犯人の「倭人」は鈴木伝蔵といった。対馬藩の通詞である。

この事件の顛末は、池内敏『「唐人殺し」の世界』（平成十一年、臨川書店）にくわしく述べられている。九日、人相書が触れ出され、伝蔵は十八日に大坂町奉行所配下のもことによって捕縛された。五月二日、訳官・軍官らの参観のもと、処刑。

三宅英利「宝暦朝鮮信使考」の紹介する「鈴木伝蔵取調書」（『宝暦信使記録下書』）によれば、日本への恥辱をあたえられたことへの反論と、打擲された暴行への報復が、事件の契機であったという。いっぽう朝鮮の正使趙曦は、のちに、崔天宗の所有していた一面鏡が紛失、それを伝蔵の所業として馬鞭をくわえたことがあったと証言している<sup>6</sup>。

よく知られているように、上田秋成『胆大小心録』は次のような話を書きとめている。

鈴木伝蔵と云た対馬者が、何とやらいふた韓人をころして、大さわぎじやあつた。（中略）伝蔵はぎんみすんで、尻な川の韓人の舟の前で、首打たれたとき。引れて行時に、辻々にたんと見物人があつたが、新町の西口でとやら、女等がたんと立っていて、「それぞれ唐人ごろしが来た」といひて、駕の内を、美男じやあつた故に、「あれかいな、あれがなんの人をころさうぞ。公儀といふものは、むごいものじや」といふたとき。

このように民間には、鈴木伝蔵に対する同情の声があつたらしい。

この事件は『朝鮮来聴宝暦物語』のなかで小説化され、またのちに『摂陽奇観』や、講談実録『珍説難波夢』（唐人殺し）などに取り上げられたことは、前述の『「唐人殺し」の世界』にくわしい。また、浄瑠璃「唐土織日本手利」（寛政十一年）、並木正三による芝居「世話料理鱸庖丁」（明和四年・一七六七）などにも取り上げられている。

『歌舞伎年表』によれば、「世話料理鱸庖丁」は二月十八日に大坂で上演。唐使の饗応役が傾城におぼれたことから家宝の香箱を失い、それが唐人らの悪巧みと知ったので、家臣の通詞伝七が取り戻そうと忍び入り、唐人の天敬宗を殺害。このとき誤って家臣を殺害する。逃亡した伝七は、自分の父が住職をつとめる浄土寺にかくまわれるが、家臣の一子浜田郷介に討たれる、という筋である。外題は、「鱸庖丁」という狂言があることにもとづき、それと同時に鈴木伝蔵の姓をも暗示する。「天敬宗」のモデルが崔天宗、「伝七」のモデルが鈴木伝蔵である。

この芝居はわずか二日で上演禁止になったが、二十六日からは「今織蝦夷飾」と改作、奥州を舞台に、朝鮮通信使ではなく蝦夷人が殺されるという設定にして上演された。

<sup>6</sup> 後述する『胆大小心録』には「つしまの家老平田将監と云ふ人の欲心から出来たさう動じやとさ」という噂が書きとめられているが、根拠は不明である。

さらに寛政元年（一七八九）には「韓人漢文手管始」が上演される。役名は上演によって小異があるらしいが<sup>7</sup>、主人公は「今木伝七」という、長崎家の家臣。彼が、唐人ならぬ「唐人組」の「西天の宗九郎」を相手に、家宝の笛をめぐって争う、という設定である。「西天の宗九郎」のモデルが「崔天宗」であることは、いうまでもない<sup>8</sup>。

さて、まったく緊張感のないところから、すぐれた文藝作品は生まれまい。生まれるとすれば無難な外交辞令である。

正徳の通信使においては、新井白石による改革があった。くわえて白石は日本の儒学の力を誇示するために、室鳩巢・祇園南海ら一流の儒者を呼び寄せて、唱和に当たさせた。李東郭という名前が日本人に特に強い印象を残したのは、こういった緊張感があったからこそであろう。

一方「韓人漢文手管始」は、「日本古典文学大系」にも収録され、近年も平成六年（一九九四）に公演がなされるなど、決して評価の低い作品ではない。辛基秀『朝鮮通信使』（明石書店）はこの芝居について「大坂での不幸な事件もお互いの理解を深めた」と書いておられる。それはいささか綺麗ごとにするにせよ、「韓人漢文手管始」もまた、屈折した形ではあるものの、朝鮮に対する関心があったからこそ生まれた作品である。

同様に『日東壯遊歌』が印象的であるのも、日本に対する緊張感があるからだ。良くも悪くも関心のない国を訪れたのであったなら、これほど興味深い記述とはならなかったに相違ない。最後にその点に触れることにする。

\*

さて冒頭で、正徳の通信使李東郭について触れた。

李東郭には、奇妙な伝説もあった。明和五年（一七六八）に成った、西山拙斎の『間窓項言』に、次のような記事がある（原漢文）。

正徳の年、命を奉じて韓人を迎へ接す。其の学士李東郭なるもの、才を負うて豪放なり。自ら謂ふ、日東の騷人、我れに若くものなしと。南海これと唱酬数日、手筆を輟めず、詞ますます瓊新、東郭竟に屈す。将さに別れんとして、劍に杖り立ちところに贈別二十四章を賦して之れを寄す。東郭逡巡、一詩を和する能はず、大に慙恨して去る。相伝ふ、東郭、釜山海に至りしころ、幅血して猝かに死すと。

<sup>7</sup> 一九九四年の上演では「十木伝七」と「幸才典藏」という役名で演じられた。前者に扮したのは中村雁治郎、後者は中村富十郎。ちなみにこのときの外題は「漢人韓文手管始」。

<sup>8</sup> 全体に、人をあやめてしまった主人公に対して脚本は周情的であり、非難する傾向はまったくといていいほど見当たらない。

実際に東郭が亡くなったのは帰国して数年ののちであるから<sup>9</sup>、もとより根も葉もない噂話に過ぎない。しかし傲慢なまでに誇り高い朝鮮通信使と、それを打倒する日本人という像が、十世紀後半に形成されていたことは、これによって窺うことができる。

実際、正徳の通信使について、歓迎一色であったというふうに書いたなら、それは一面的に過ぎるであろう。

「季刊日本思想史」49号（平成八年十月）は朝鮮通信使の特集であった。これに堀口育男「正徳辛卯朝鮮通信使と富士山の詩」、杉田昌彦『問槎畸賞』の序跋について」という興味深い論文が収録されている。

堀口氏論文に引かれているように、李東郭に富士山を詠んだ詩がある。

冷氣砭人骨	冷氣	人骨に <sup>いしぼり</sup> 砭す
肩輿且少停	肩輿	且つ <sup>しばら</sup> 少く停む
休誇千丈白	誇ることを休めよ	千丈の白
争似四時青	争でか似かん	四時の青に

「千丈白」は富士山を指す。それと対比されている「四時青」は、朝鮮半島の山々ということになる。何かというと日本人は雪をたたえた富士山を誇りにするが、四季を通じて青々とした朝鮮の山には及ばないよ、と詠んだものであろう。堀口氏はこれらの漢詩を通じて、通信使のなかに日本を見下す風潮も存在していたことを明らかにする。

いっぽう日本側も、ときに通信使に対する嫌悪感をかくさなかった。杉田氏論文からは、服部南郭や田中桐江といった儒者たちが、安藤東野・山県周南ら我が国の儒者の詩文にくらべて、朝鮮通信使の詩文のレベルを低く評価していたことが知られる。たとえば桐江は「韓人の作った詩文を『汚』即ちレベルの低いものとしてこの篇から削除したい」という意見が出たことに対して、「東野の『文』は『涯涘』がないほど奥行きが深く雄大なものであるが、その雄大さは『東海若』に対する『河伯』のように、より卑小な存在があつて初めて相対化され認識される。韓人の詩文はその『河伯』の役割を果たす<sup>10</sup>、あるいは「周南の『詩』はそのままでも古の美人達のように長く名を留めるはずであるが、韓人達のはるかに劣った詩と対置させることにより、その美はより一層引き立つ」という主旨のことを書いている。これはもはや嫌韓ともいふべき感情的な言い方であろう。

西山拙斎の随筆に書かれたような噂の成立した背景が、こういった現実から窺え

<sup>9</sup> 享保四年に来日した通信使が「李東郭前年亦已作古人」とこたえている（『備後叢書3／備陽六郡志』）。

<sup>10</sup> 杉田氏訳。なお「河伯」は『莊子』秋水篇に登場する黄河の神。「東海若」は、『莊子』に従うなら、「北海若」とあるほうがふさわしい。

る。

宝暦の通信使に話をもどす。

一月二十八日、京都にはいった金仁謙は、反日感情を隠していない。

館舎は本能寺 五層の楼門の上には  
十個餘りの銅輪を施した相輪が 天高くそびえている。  
庭の水石も見事であり 竹やその他の木も趣きがある  
倭王の居所というから その贅沢ははかり難いところである  
山の姿は雄壮 河は野をめぐって流れ  
沃野千里を成しているが 惜しんで餘りあることは  
この豊かな金城湯池が 倭人の所有するところとなり  
帝だ皇だと称し 子々孫々に伝えられていることである  
この犬にも等しい輩を 皆ことごとく掃討し  
四百里六十州を 朝鮮の国土とし  
朝鮮王の徳をもって 礼節の国にしたいものだ

まことに乱暴な発想である。あるいは、こういった日本に対する反感が、なんらかの理由で殺人事件にまでつながったのではないかとすら、思えてくる。勿論、外国から来日した要人を殺害するなどという行為は、いかなる理由があろうとも容認されるものではないのだが。

以上、本稿では紙幅の都合から正徳と宝暦の通信使にしぼり、俗文藝とのかかわりを考えてみた。興味本位なものもふくめ、朝鮮通信使がさまざまな形で俗文藝に取り入れられたこと、そのなかには、必ずしも通信使に対して好意的ではないものもあったことが知られる。

一方に、儒者というまでもなく、庶民レベルにもいたる健全な関心があった。その一方では感情の行き違いや、不幸な形でのかかわりもあった。朝鮮通信使と俗文藝の関連は、鎖国下の海外交流の光と影について考察する手がかりになりうると考えられるのである。

(所属は発表当時)